

宇都宮大学農学部教授 斎藤潔

“米国人材教育”こそ強さの秘密

米国では、次世代の農業を担う子どもたちに様々な教育を提供している。農業のユースプログラム、農業高校における自主プロジェクト、さらには成人教育を担当する普及事業だ。

特に普及事業については、普及指導員が大学から派遣されるという。日本とは異なるシステムになっている。

米国の人材育成に着目し、『アメリカ農業を読む』という著書を上梓した斎藤潔 宇都宮大学農学部教授に話を聞いた。

専門外だから分かった 米国農業の強さの秘密

昆吉則（本誌編集長） 今回はこの度『アメリカ農業を読む』（農林統計出版）という著作を上梓された斎藤先生にお話をおうかがいします。でも、先生は米国農業がご専門というわけではないんですね。

斎藤潔（宇都宮大学農学部教授） え、私は日本国内における農業経営

の企業化と法人化に関する研究をずっと行なってきたのですが、ここ10年間は米国農業の調査研究に携わる機会に恵まれました。アイオワ州立大学の客員教授として生の米国農業に触れたことがきっかけとなって、米国農業の強さの源泉が人材教育・育成にあるという点に着目しました。この本をまとめました。専門外だからこそ、自由に書けた部分があると思います。

昆 私も、米国の農場を何度か視察

に訪れています。その中で、あるストロベリーロードで働く日系人の家族に出会ったのですが、都会に出て行って会計士といったそれなりの職と地位を得ている息子が、農業にビジネスチャンスを見出して農業をやるうとしていてという印象的な場面に遭遇しました。日本でもそういうことがないとは言いません。ですが、当時は日本では農村では後継者がいないとずっと言い続けられてきた時代だったものですから、米国人の若者というのはフロンティアスピリットにあふれているし、またこれが教育の違いなんだと思いました。

斎藤 米国は移民の国ですから、フロンティアスピリット、パイオニアスピリットという国民性があつて、全部自分で作り上げるという精神が農村社会にもあります。背景には、

貧しくて家族が暮らせない、だから未開の土地を開墾していかなければいけないという歴史的な側面もないわけではないです。でも、それが西部開拓につながってもいいました。

親子とはいえそれぞれに開墾していった農地で営農し、息子が父親の農場を引き継ぐ場合は相続ではなく、買うというのが一般的です。もし金銭面の条件に合わなければ、息子は買うことはしません。その辺はきわめてドライですよ。

昆 米国だけでなくオーストラリア、ニュージーランドのように移民国家の農家は農場を売ったときが「あがり」という意識を持っていますよね。

斎藤 日本でも米国流でやろうとした畜産農家の親子がいたのですが、息子の方にはまとまったお金がないので月々ローンで父親に代金を払う

選択したんです。ところが、税務署は親子間の取引は認めないとなりました。農家から税金が取ることができないからの判断ですよね。

昆 農業においては、相続税と贈与税の納税猶予が認められているように、余計な税金を払わなくてもいいというようなお目こぼしがありますから。だから、本来農家と呼ぶべき人でない人が農地を持って納税猶予し、農地の流動化を妨げているという悪弊の温床になっています。

齋藤 農業所得がある人が毎年どれくらい税金を払っているかという国税統計を見ますと、農業者で所得税を払っているのは3分の1程度です。じゃあ米国で所得税を払っている農家はどのくらいいるか、というと、ほとんどいないでしょう。コンサルタントや弁護士らによって節税対策がきっちりしていますから。

米国農業と日本農業、どっちがグッドか？

昆 それは米国農家が豊かな人たちばかりでもないということの裏付けにもなるのではないのでしょうか。実際、米国農家の規模は大きく、稼いでいると日本人は思い込んでいますけれど、販売金額が5万ドル以上10万ドル以下の農家は少なくない。日

本の農家よりも米国の農家の方が貧しいといえなくもないんですね。

齋藤 農業ビジネスの成功者への生産・資産その他を含め集中度が非常に高いから、そのイメージを持ってしまふからなのでしょうね。米国にはビジネスチャンスを見つけて、急激に大きくなる、強くなる農業経営者がいます。自由競争の中におけるビジネス育成はそういうものだという認識が社会のコンセンサスになっていますので。

ただ、そうしてビジネスとして大きくなった、強くなった米国農業が消費者にとって良い農業なのか、という点については、どうでしょうか。米国農業の強さを象徴しているのはトウモロコシですね。飼料を作って安い肉を作り、スナック菓子を作り、コーンシロップは清涼飲料水になる。いくなればファストフードの原料です。しかも米国社会の中では朝から晩まで常に飲食されているようになっていて。米国では明らかに肥満の人は人口比の30%超、やや肥満の人も同じくらいです。つまり体格面で健全な人は米国に3人に1人しかいないという計算です。当然ながら医療費は高くなっているし、世界で一番強くて効率的な農業が、世界で一番不健康な人を作っている。米国農業はストロングではあるけど、



齋藤 潔

■プロフィール (さいとう・きよし)

1959年青森県出身。東北大学農学部卒業、東京大学大学院農学系研修科修士課程、博士課程を経て89年東京大学農学部助手。96年財団法人日本農業研究所主任研究員、2000年宇都宮大学農学部助教授を経て03年より現職。06-07年アイオワ州立大学農学部客員教授も務めた。これまでの研究歴は農業経営の企業化と法人化、農業普及事業と農業教育の国際比較研究、農家家族を対象にしたファミリーカウンセリング研究等。



消費者にとってはグッドでフレンドリーな農業ではないかと思っ
ています。

対して日本の農業は生産量こそ少ないかもしれない、農家はどんぐりのせいくらべかもしれない。だけど、消費者にとってはグッドでフレンドリーな農業ではないでしょうか。

昆 米国農業の見方については非常に同感しますね。そして農業そのものというよりも、食、そしてサービ
スを含めた食文化と一緒にお客さんに提案し続けてきた日本の農と食の有り様については、自信を深めていますね。

教育者であるか 農政の末端であるか

昆 先生の本の記述の中で、東畑精一氏（編集部註・日本の農民の大半は企業者精神を欠如した「単なる業主」であり日本農業を動かす「経済主体」とはなり得ないと論じた農業経済学者）について言及された記述が印象的でした。

齋藤 東畑先生の考え方は実にシンプルで、農業においても投資が経済を動かしていくということをおっしゃられています。しかし、私は投資すなわちお金だけではなく人的資本、労働力の中のアイデアや実行力のある人たちが経済を動かしていく牽引車になると考えています。ただ、現在の米国では農機メーカーや外食産業、GM種子メーカーが農業を動かしているという実態があつて、一般の農業者のアイデアや発想が実現できるところに限られていて力が弱まっているのは問題ですし、本来米国の農民が持っていたフロンティアスピリットが失われてしまいつつあるのではないかと危惧もしているところです。

昆 なるほど。ただ、大資本による農業インテグレーションという言い方で批判的に論じられがちなのですが、そう簡単に言い切れるものではなく

て、農業側にマーケットインの意識をもたらず意味を考えてみれば、米国においては弊害が日本でも同様であるかとは言い切れないのではないかな、と私は思うのですが。

それはさておき、米国農業の人材教育これについて先生は研究を続けられてきたわけですが、日米を比較して最も性質が違うのが普及員ですね。この辺を詳しくお聞かせください。

齋藤 米国で普及指導が始まったのは、1914年なんです。大学に所属する普及員が何を指導したかというところ、農業と生活改善です。

昆 貧しい開拓民だから働くので精一杯だった。

齋藤 そうです。結婚して2人で住んでも働くばかりで家庭の実態がない。料理を作るにしても料理を作る時間も知識もない。でも、普及員がくると、何日かとまっていつて赤ちゃんの靴下はこうやって縫うのよとか、料理つてやつはこうやって作って瓶詰めしておきなさいって教えてくれる。夫とどういことを話せばいいかというようなことも教えてくれたんです。子どもたちに対しては、すでに農村内の学校で聖書を読めるよう国語や自国の歴史を教えるはいいましたが、それに加えて科学的農業を教えていきました。

昆 その場が後々4日クラブにもなっていたわけですね。

齋藤 普及員に科学的農業を教わった子どもたちが農業経営者になったときに、今の米国のストロング農業への成長が始まったわけですね。

昆 でも、日本の場合、普及員もあ
るいは4日クラブも農政の末端に位置づけられているのが現状ですね。米国では教育者であると同時に、農家の真の意味でのコンサルタントとして機能しています。

齋藤 私の研究領域ですが、米国の普及員制度のいいところを採用して農家家族のカウンセリングに取り組んでいます。そこに普及員が何らかの形で関わって、農家の抱える問題をうまく解決できるようなシステムを作っていければと思います。

昆 先生の本は米国農業の歴史を振り返っていますが、日本の農業・農村社会の合わせ鏡として読む価値があると思います。本日はありがとうございました。



『アメリカ農業を読む』
（農林統計出版）定価4,200円